

『都合の良い優しさ』

作者 浅羽一

彼は本当に昔から優しかった。でも、彼は決して馬鹿でなかった。だから目の前で涙ながらに許しを請う女に対して、穏やかな口調ながらもはっきりと「悪いけど、無理だよ」。

果たして彼女はばつと顔を起こした勢いでソファからも立ち上がり、あたかも仇敵を睨み付けるみたいな形相で吐き出した。「どうしてよ」と。言外に、「私がこんなにも謝っているのに、あんたは最低の男だ」と言っていた。

彼はテーブルの上に乗せられた鍵を見つめた。二ヶ月前の別れに際して返してもらい損ねていたそれは、良く見れば表面に細かい傷が幾つも走っていて、キーホルダー代わりに付けられていた携帯電話用のストラップも先端のクラゲがずいぶんとくたびれてしまっていた。丁度一年前、初めてのデート記念としてその日に訪れた水族館で互いに一つずつ、お金を出し合って買ったものだった。だけど彼の分のクラゲはもう、彼自身の手によつてとつくに真夜中の海へと帰されていた。波が暴れているわけでもないのに顔中を濡らした塩水の味を、彼はまだそんなこともあったなと懐かしめるほどには忘れられていなかった。

「出て行ったのは、そっちだろ」

彼は尚も自分を見下ろす彼女へ座るように手で促してから、そう言った。

「止めなかったのはあなたじゃない」

彼女はやはり立ったままで、再び嗚咽を漏らし始めた。

「だって君はもう僕の言葉なんて聞いてなかったじゃないか」

彼は静かにそう言ったけれど、両手で顔を覆う彼女に聞いている様子はなかった。だから彼は、続けて吐き出しそうになった「君はあの男の方に夢中だったから」を丸ごと飲み込んだ。胸に苦い酸味が広がり、思い出したくもないのに、背の高いコンパクトカーの中で抱き合っていた彼女と男の記憶が蘇った。職場から家まで送ってもらって気が緩んだのか、或いはどうしても離れがたかったのか、たまたま仕事を早く切り上げられて帰ってきた彼の視線の先で、彼女はいつそ自分から体を預けるように延々と男へ唇を重ねていた。

彼は何一つとして気付くどころか怪しいとさえ思っただけの己の蒙昧さを呪う一方で、今まで上手に隠してきたのならせめて今も別の場所でやってくれば良かったのにと、裏切られた事実を怒るよりも、いっそ四肢が震えるほどの苦痛にそんな歪んだ願いを抱いた。心臓が激しく動き、呼吸すらままならず、思わずその場に膝を突いた彼はまるで敗残兵さながらにその場から逃げ出した。二時間後、犬のマーキングよろしく近所の電柱の下に吐きまくった末に辿り着いたコンビニのトイレで、他の客の迷惑も顧みず長い間ずっと個室に籠もった挙げ句、洗面台がびしょ濡れになるほど激しく何度も顔を洗ってようやく生身の人間らしい顔に近付けた彼がマンションの部屋に戻った時、彼女はすでに部屋着に着替えてリビングでくつろいでいて、至って自然な笑顔で「お帰り」と言った。だから彼もまた普段通りに「ただいま」と返そうと、頬を左右に引っ張り上げ、勝手に荒くなる息を無視して、それからやつと口を開き、そうして代わりに「どうして」と言ってしまった。

彼女は最初こそ「どうしたの」と鸚鵡返しをするように言っていたが、しばらくして全てを悟ったのか、それとも理由はともかく突然に何もかもをぶち壊してしまいたくなったのか、「…ああ」と短く呟いた後で、「別れよっか」と口にした。再び「どうして」と問うた彼の眼差しから逃げるように、彼女は顔を逸らしていたが、しかしその声はむしろ聞き直っている風だった。

「最近、ずっと考えてたんだけどさ。私たち、きつともう無理だよ」

彼女は言った、淡々と。

「あなたはとても優しい人だし、私を大切にしてくれるけど。でも、それって、何て言うか、ちよつとずれてるんだよね」

「僕が、悪かったのか？」

「そう言うわけじゃないけどさ。でも、一緒に暮らすようになって、いつも一緒にいるようになって、それで初めて見えてくるものってあるじゃない」

つらつらと語る彼女の声を聞きながら、彼はむしろ彼女の姿がまるで見えなくなっていくような感覚を抱いていた。そこにいたのは、これまでずっと彼が見つめ続けてきた彼女でなく、まるで見たこともなかったような女だった。

「君は、変わったね」

彼の言葉に彼女は「変わったのは、生活と、お互いの気持ちよ。私自身は何も変わっていないもの」と答えた。

だとすれば君は最初から酷い女だったんだな、とはもう彼は言わなかった。それに、もしも仮にそんな女であったとしても、彼は確かに愛していた。ただ、その愛が、彼女の言葉を借りるとすれば「ずれ」ていただけだ。彼は決して認めたくなかったものの、それはもしかしたらあたかも三次元のグラフ上を走る直線のごとく、ある一方から見れば交わっていたように見えていただけで、その実は決して重なるものでなかったのかも知れない。

「荷物は、また今度、勝手に持って行くておくから」

翌朝、彼女は丁寧に化粧を施された顔に笑みさえ浮かべて言った。

彼は聞いた、「これからどうするんだ」と。

彼女は「しばらくは友達の方に泊まらせて貰えることになったから」と答えた。

彼はもう、それが誰とは尋ねなかった。

そうして彼らは呆気なく終わった。最後まで彼は自分の目を見たことを話さなかった。それが彼にとつてせめてものプライドであり、また別の道へと進んでいく彼女へと捧げる最後の優しさだった。卑屈だと嘲られたり間違っていると言われたりすることがあるとしても、少なくとも彼は心からそう思っていた。そして彼は彼女を恨んで否定する代わりに、彼女への想いの一切を過去にしようと決めた。楽しかった出来事も、幸せだった一時も、苦しんだ瞬間も、何もかも等しく単なる事実としてのみ受け入れようと。

だからこそ、再び彼女が目の前に現れた時も、彼は驚きこそしたものの動揺しなかった。そして玄関の扉の向こうに泣きながら立っていた彼女に「どうして」でなく「久しぶり」と告げて部屋へと招き入れ、ミルクを温めて差し出しもした。マグカップの縁より少し下くらいまでミルクを入れて、六〇〇W^{ワット}の電子レンジで一分五十秒。二分じゃちよつと熱すぎて、一分四十秒じゃ僅かに物足りない。それが彼と彼女にとつて共通の好みだった。そしてやがて落ち着いた彼女がしばらくして再び泣きながら「やっぱりあなたのことが…」と告げてきた時も、やはり彼は動揺せずに「ごめん」と応えた。

「あなたっていつつもそう」

不意に嗚咽を止めた彼女から発せられた言葉に、彼は改めて「とりあえず座りなよ」と返した。けれど彼女は案の定、それを無視して、それから続けて「結局、都合の良い時だけ優しくして、私が本当に必要な時はまるで気付いてくれやしない」。

彼は黙って聞いた。「私がどれだけ寂しかったか、分かる？一緒に生活しているのに、

ちゃんと二人で過ごす時間は離れていた時よりも減っていて、それなのにあなたは少しもこっちの気持ちなんて考えもしないで」。彼は次々と放たれる言葉をひたすら受け止めた。「あなたって結局、ただの偽善者じゃない」

最後に彼女はそう言って、そして満足したのか、はたまた諦めたのか、荷物を掴んで別れの言葉も残さずに部屋を出て行った。テールの上には合い鍵が残されたままで、ねじれた位置にある愛情の間で泳ぎ疲れたようなクラゲが一匹、転がっていた。彼は黙って立ち上がり、玄関の扉に鍵を掛けた。

自分から裏切ることとは決してしない。泣いている相手がいればよほど状況が悪くない限り支えようとする。誰かに嫌われてしまったとしてもだからといって憎しみを返したりしない。けれど、そうして離れていった人間が再び戻ってきたとしても、以前と全く同じように接してやることは出来ない。それがつまりは偽善であり、彼女に言わせれば「都合の良い優しさ」であるのだとすれば、なるほど彼は確かにその通りの人間であるのだろう。

彼は無言で彼女が使っていたマグカップを掴み、それを思い切り壁へと投げつけた。真に優しい人間であればそんなことしないのかも知れないけれど、彼はもう躊躇わなかった。

荒波の中で傷ついたクラゲが故郷へふるさと帰りたいのだと訴えかけているように、彼へとあの夜の塩の苦さを思い出させる。散らばった陶器が床にうずくまった彼の下にまで大きな破片を飛ばしている。だから彼はもう一度それを掴み、凹んで壁紙の破れた壁へと腕を振った。きつと盛大に響いた音は、だけど彼の耳には聞こえていなかった。

〈了〉